或の曰く、昔三の男あり、同しく一の女を娉ふ。娘子嘆息ひて曰く、「一の女の身の、滅易きこと露の如く、三の雄の志の、平し難きこと石の如し」といふ。遂にすなはち池の上を彷徨り、水底に沈み没りぬ。ここにその壮士等、哀頽の至りに勝へず、各所心を陳べて作る歌三首

三七八八番

耳無の　池し恨めし　我妹子が　来つつ潜かば
水は涸れなむ

三七八九番

あしひきの　山縵の児　今日行くと　我に告げ
せば　帰り来ましを

三七九〇番

あしひきの　山縵の児　今日のごと　いづれの
隈を　見つつ来にけむ